鹿児島金衛（スクールリーダーシップ開発専攻）

# 一生は一回、生命は一個、輝く生き方をしよう！

## 1. 教育を考える一言

私の教育を考える一言は、「一生は一回、生命は一個、輝く生き方をしよう！」という言葉です。私は折に触れてこのことばを子どもたちに繰り返し語りかけてきました。この言葉に出会ったのは、1991 年（平成３年)、私が４５歳、中学校の教頭職にあったときでした。勤務している中学校は生徒数が千人を超えるほどの大規模校で、生徒が荒れていて毎日のように事件や事故が起こり、生徒指導に明け暮れていました。勤務校には１０人前後の男子非行
グループが２つあり、生徒間の暴力、対教師暴力、恐喝、器物破損、盗んだバイクの無免許運転等が日常的に発生し、教頭としてその対応に追われる日々を送っていました。子どもたちの投げやりで刹那的な生き方に、どう語りかけるか、子どもたちの心に響く指導法はないか等、葛藤と悩む日々が続きました。その頃、定期購読していた、『総合教育技術』（小学館、1991　11 月号、8-9 頁）という雑誌を開いたところ、龍源寺住職で禅僧の松原哲明氏の「先生！私に人生のあらすじを示し、火をともしてくれた」という随筆に出会いました。一読して私は感動し、体中に身震いするほどの熱い衝撃が走りました。私の心の中の教員魂に火がついた瞬間でした。私は「生徒に生き方指導のできる教師になろう」と決意しました。松原氏は、「子どもの人生劇場の脚本作りを手伝うのは親や教師だ」と述べています。

## 2. 背景

時代の背景としては、1989 年（平成元年）に改訂された新学習指導要領の移行期間でした。新学習指導要領では、新しい学力観、自己教育力、生活科の新設などが提言されています。特に、自ら学ぶ意欲の育成と思考力、判断力、表現力など、社会の変化に主体的に対応できる能力の育成が学力の捉え方として強調されています。新学習指導要領の全面実施を目前にし、新しい学力観と授業の改善が求められた時代でした。

## 3. 考察

松原氏が指摘するように、私たちの人生において分かっていることは、自分は今、生きているということ、いつかは死ぬということです。一回きりの人生をどう生きていくかを子どもたちに教えることは実に重要なことだと思います。子どもたちはそれぞれ顔・形が違うように、一人ひとりが異なる存在です。そして、だれにでも「よさ」があります。「よさ」とは他と比較すると、例え、劣るものであっても、その子の中にあって「キラリ」と光るものです。その子の長所、特技、取り柄、持ち味、といったものです。子どもたちに、「一生は一回、生命は一個、輝く生き方をしよう！」というエールを送りたいと思います。

参考文献

松原哲明「先生！私に人生のあらすじを示し、火をともしてくれた」、『総合教育技術』小学館，1991 年、11 月号